

研究課題	「協働的アクティブラーニング」の確立を目指して
副題	～ICT 機器を効果的に活用した 21 世紀型の学習形態を考える～
キーワード	協働型アクティブラーニング ICT 活用 デジタルとアナログの往還
学校/団体名	公立横浜市立白幡小学校
所在地	〒221-0075 神奈川県横浜市神奈川区白幡上町
ホームページ	<a href="https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shirahata/">https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/shirahata/</a>

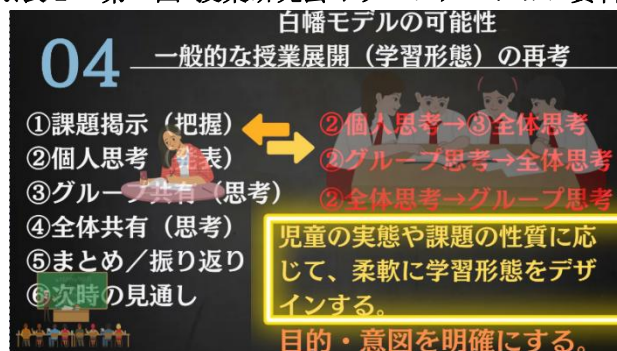
## 1. 研究の背景

近年、社会の急速な変化に伴い、子どもたちには知識の習得にとどまらず、課題を主体的に発見し、多様な他者と協働しながら解決していく力が求められている。学習指導要領においても、「主体的・対話的で深い学び」の実現が重視されており、児童が学習課題に主体的に関わり、対話を通して思考を深める学習環境の構築が重要な課題となっている。

本校ではこれまで、「21 世紀型スキル」の育成を柱に据え、児童同士の協働を基盤とした学習活動を通して思考力・判断力・表現力を育成する授業づくりに取り組んできた。特に、国語科における言語活動の充実や、思考操作を具体化するラーニングスキルの活用、ゲストティーチャーとの学習活動などを通して、児童が主体的に課題に向き合い、他者との対話を通して思考を深める学習環境の形成を目指してきた。また、これらの取組を国語科にとどめることなく、社会科や総合的な学習の時間など他教科へと広げ、教科の特性に応じた見方・考え方を働かせながら学びを深める授業づくりを進めてきた。こうした研究の中で本校では、児童同士の協働を基盤とした学習形態として「協働型アクティブラーニング」を位置付けてきた。これは、児童が司会や記録、タイムキーパーなどの役割を担いながら学習活動を進め、互いの考えを交流しながら課題解決に向かう学習形態であり、児童が主体となって学びを創り上げていくことを特徴としている。このような学習形態の導入により、児童が互いの意見を比較しながら思考を深めたり、自分の考えを根拠をもって説明したりする姿が見られるようになってきた。

GIGA スクール構想の推進により、一人一台端末が整備されたことで、児童の思考過程を可視化し、共有する学習環境が整いつつある。ICT 機器の活用により、児童の考えを即時に共有し、多様な意見を比較・検討することが可能となるとともに、学習の過程を記録として蓄積し、振り返りや再構成につなげることができるようになった。しかしながら、ICT 機器の活用が必ずしも思考の深化につながるとは限らず、対面での対話やノートを用いた思考整理など、アナログな学習活動が果たす役割も依然として大きい。※表 1 第一回 授業研究会オリエンテーション資料

そこで本研究では、これまで本校が取り組んできた協働型アクティブラーニングを基盤としながら、ICT 機器の特性を生かした学習活動を取り入れ、児童の思考過程を可視化し共有する学習環境の構築を目指すこととした。



## 2. 研究の目的

本研究の目的は、協働型アクティブラーニングを基盤とした学習活動を通して児童同士の対話を促進し、思考力・判断力・表現力の育成を図るとともに、一人一台端末を活用した学習環境の中で児童の思考過程を可視化し、協働的な学びを深化させることである。

本校ではこれまで、児童が主体的に学習に関わり、他者との対話を通して思考を深める授業づくりを目指して研究を進めてきた。特に、児童が司会や記録などの役割を担いながら話し合い活動を進める学習形態を取り入れることで、児童が主体的に学びを創り上げていく授業の実現を図ってきた。その結果、児童同士が互いの考えを交流しながら学習課題の解決に向かう姿や、自分の考えを根拠をもって説明しようとする姿が見られるようになってきている。

一方で、協働的な学びの中で生まれた考えをどのように整理し、学級全体で共有しながら思考を深めていくかという点については、学習環境のさらなる工夫が求められている。また、話し合い活動の中で発言が一部の児童に偏る場面や、学習の過程が十分に可視化されないために学びの蓄積が次の学習に生かされにくいといった課題も見られる。

こうした課題を踏まえ、本研究では ICT 機器を活用しながら児童の思考過程を可視化し、互いの考えを共有する学習環境を構築することで、協働的な学びをより充実させることを目指す。また、ICT 機器の活用を目的化するのではなく、対面での対話やノートを用いた思考整理などの学習活動と関連付けながら学習を構成していくことにより、児童の思考をより深める授業づくりを実現することを目標とする。

## 3. 研究の経過

本研究は、全校体制による校内研究として推進した。年度当初に研究全体会を開催し、これまでの研究成果と課題を整理するとともに、今年度の研究の重点について共通理解を図った。その上で、各学年において教科の特性を踏まえた単元構想を作成し、協働型アクティブラーニングを基盤とした授業実践を進めた。

授業実践では、児童が主体的に学習に参加できるように、司会や記録、タイムキーパーなどの役割を児童自身が担う学習形態を取り入れ、グループでの話し合い活動を中心とした学習活動を展開した。また、児童の思考を整理し、対話を促進する手立てとしてラーニングスキルを活用し、考えの根拠を明確にしたり、他者の意見と比較したりする活動を位置付けた。さらに、一人一台端末を活用し、児童の考えをクラウド上で共有する活動を取り入れた。これにより、児童一人一人の考えを学級全体で共有し、多様な視点を比較しながら学習を進めることができるようにした。また、学習の振り返りにおいても端末を活用し、児童が自分の学びの過程を記録し、次の学習に生かすことができるようにした。

研究の検証に当たっては、授業研究会を実施し、授業記録や児童の学習成果物、振り返りなどを基に授業の成果と課題について協議を行った。また、児童アンケートや学習の様子を通して、児童の学びの変容について継続的に把握しながら研究を進めた。

※表2 研究の経過

時期	内容	記録等
4月	ICT活用研修	実態調査・取組の共有
	取組内容の共有	実践提案
	講演	職員アンケート
5月～	授業研究会	自己評価シート
7月	中間の振り返り	職員アンケート
9月	教科横断的な取り組みの試行	実態調査
12月	公開授業研究会	参加者アンケート
3月	研究の総括	職員アンケート

#### 4. 代表的な実践

本研究の代表的な実践として、社会科の単元において協働型アクティブラーニングと一人一台端末を組み合わせた学習活動を実施した。本単元では、社会的事象を多面的・多角的に捉えることを目的とし、児童同士の対話を通して考えを深める学習活動を中心に授業を構成した。単元の導入では、資料や映像資料を提示しながら学習課題を設定し、児童が自ら問いをもつことができるようにした。その際、一人一台端末を活用して児童の疑問や考えをクラウド上に記録し、学級全体で共有した。これにより、多様な視点から学習課題を捉えることが可能となり、児童同士が互いの疑問や意見を手掛かりに学習を進める基盤を形成することができた。展開場面では、児童が司会、記録、タイムキーパーなどの役割を担いながらグループでの話し合い活動を行った。児童は資料や調査結果を基に自分の考えを整理し、ラーニングスキルを活用して根拠を明確にしながら意見を交流した。話し合いの過程では、一人一台端末を活用して各自の考えを共有し、学級全体で意見を可視化した。その後、グループでの対話を通して互いの考えを比較・検討し、学習課題に対する自分たちの結論をまとめた。



※図1 授業研究の様子

このように、ICT機器を活用して児童一人一人の考えを可視化し共有することで、多様な意見を短時間で把握することが可能となった。一方で、思考を深める場面では、資料を囲んでの議論やノートを用いた思考整理など、対面での対話を重視した活動を位置付けた。これにより、デジタルとアナログを往還しながら学習を進める学習過程を構成することができた。授業の振り返りでは、児童が端末を用いて自分の考えの変化を記録し、学習の過程を振り返る活動を行った。その結果、「友達の意見を聞いて考えが変わった」「いろいろな見方があることに気付いた」など、対話を通して思考が深まったことを実感する記述が多く見られた。また、児童が互いの考えを基



に新たな疑問を生み出す姿も見られ、学習課題に主体的に関わる態度の高まりが確認された。

この実践を通して、児童の思考過程を可視化する ICT の活用と、対面での対話を重視した協働的な学びを組み合わせることで、児童同士の対話を基盤とした深い学びを実現できる可能性が示された。

※図2 グループディスカッションの様子

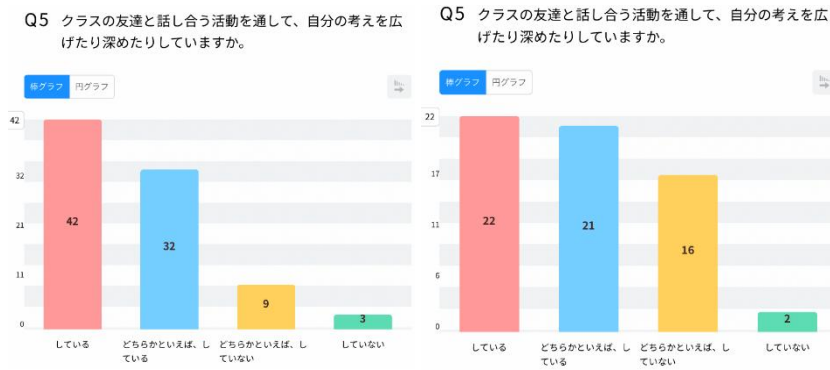
## 5. 研究の成果

本研究を通して、協働型アクティブラーニングを基盤とした学習環境の構築により、児童が主体的に学習に関わり、他者との対話を通して思考を深める姿が顕著に見られるようになった。従来の授業では、教師の説明を中心として学習が進む場面も少なくなかったが、児童が司会や記録、タイムキーパーなどの役割を担いながら学習活動を進める形態を取り入れたことで、学習への参加の在り方が変容し、児童一人一人が主体的に学習に関わる機会が増加した。特に、学習課題の解決に向けて互いの考えを交流しながら学びを進める過程において、児童が自ら問いを発し、他者の意見を手掛かりとして自分の考えを再構成する姿が見られるようになった。

また、思考を支えるラーニングスキルを継続的に活用したことにより、児童が自分の考えを根拠と結び付けて説明したり、他者の意見を踏まえて自分の考えを修正したりする姿が増えてきた。話し合い活動においても、単に意見を出し合う段階にとどまらず、「なぜそのように考えたのか」「他の見方はないか」といった問いを基に互いの考えを比較・検討する場面が生まれ、思考の質が高まりつつあることが確認された。このような対話を通じた思考の深化は、主体的・対話的で深い学びを実現する上で重要な成果であると考えられる。さらに、一人一台端末を活用した学習活動の導入により、児童一人一人の思考過程を可視化し、学級全体で共有する学習環境が整いつつある。クラウドを活用して児童の考えを共有することで、多様な視点を短時間で把握することが可能となり、互いの考えを比較しながら学習を進めることができるようになった。また、児童の考えをデジタル上に蓄積することで、学習の過程を振り返り、自分の考えの変容を自覚する機会が生まれた。このような ICT 機器の活用は、児童の思考の可視化と共有を促進し、協働的な学びを支える有効な学習環境として機能していることが示唆された。

授業実践の分析を通して、ICT 機器の活用と対面での対話的な学習活動との関係についても重要な示唆が得られた。意見を共有する場面では ICT の即時性や共有性が有効に働く一方で、思考を深める過程においては、資料を囲んだ議論やノートを用いた思考整理など、アナログな学習活動が大きな役割を果たしている場面が多く見られた。このことから、児童の思考をより深めるためには、ICT の特性を生かしたデジタルの学習と、対話や思考整理を重視したアナログの学習を相互に関連付けながら学習活動を構成していく視点が重要であることが明らかになった。

以上のことから、本研究を通して、協働型アクティブラーニングを基盤とした授業づくりが、児童の主体的な学びを支え、対話を通して思考を深める学習環境の形成に寄与していることが



※表 3 児童（5・6年生）への意識調査

確認された。また、一人一台端末の活用により、児童の思考過程を可視化し共有することが可能となり、協働的な学びをさらに充実させる可能性が示された。

## 6. 今後の課題・展望

本研究を通して、協働型アクティブラーニングを基盤とした授業づくりにより、児童が主体的に学習に参加し、仲間との対話を通して思考を深めようとする姿が見られるようになった。また、一人一台端末を活用することで、児童の考えを共有しやすくなり、学習の過程を可視化することが可能となった。これにより、児童一人一人が自分の考えを表現し、互いの意見を比較・検討しながら学習を進める環境が整いつつあることが明らかになった。

一方で、授業実践を重ねる中で、いくつかの課題も明らかになった。第一に、協働的な学びの質をさらに高めていく必要があることである。話し合い活動が活発に行われるようになった一方で、意見の交流にとどまり、十分に思考の深まりにつながらない場面も見られた。児童が互いの考えを比較したり、根拠をもとに検討したりしながら思考を深めていくためには、学習課題の設定や発問の工夫、思考を整理する手立てなど、授業構成のさらなる工夫が求められる。

第二に、ICT 機器の活用の在り方についてである。一人一台端末を活用することで児童の考えを可視化し、共有することは可能となったが、その活用が必ずしも思考の深化につながっているとは限らない場面も見られた。ICT の活用が目的化してしまうと、児童同士の対話や思考の深まりが十分に生まれにくい可能性もある。したがって、ICT の特性を生かしながらも、対面での対話やノートを用いた思考整理など、アナログな学習活動との関係をどのように構成していくかが重要な課題である。

今後は、デジタルとアナログそれぞれの特性を生かしながら学習を構成していく視点を大切に、児童の思考をより深める授業づくりを進めていく必要がある。例えば、ICT を活用して児童の考えを共有し全体の見通しをもたせた後、グループでの対話や資料をもとにした議論を通して考えを深め、再びデジタル上で整理・共有するなど、デジタルとアナログを往還する学習の在り方を検討していくことが求められる。

本校ではこれまで培ってきた協働型アクティブラーニングの実践を基盤としながら、ICT 機器を効果的に活用した学習環境の構築をさらに進めていく。児童一人一人の思考過程を可視化し、対話を通して学びを深める授業づくりを継続することで、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していきたい。

## 7. おわりに

本研究では、協働型アクティブラーニングの視点から、デジタルとアナログを往還する学習デザインを構築し、児童同士の対話を通して思考を深める授業づくりに取り組んできた。児童の考えを ICT で可視化し共有した上で、対面の話し合い活動へとつなげることで、多様な視点を基に社会的事象を多面的に捉える学びが生まれた。今後も、児童が主体的に学び合う授業を継続的に改善し、思考力・判断力・表現力を育む学習の在り方を追究していきたい。

## 8. 参考文献

- 1.文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』東洋館出版社，2018 年。
- 2.奈須正裕『「主体的・対話的で深い学び」の理論と実践』東洋館出版社，2017 年。